海の夜空に手がとどく

鹿児島市立鹿児島玉龍高等学校　二年
白澤杏華

高岸海月と初めて会話したのは、確か五月だった。会話といっても僕が彼女の消しゴムを拾って「落としたよ」と言っただけだった。彼女はちらっと僕の方を見て何を言うでもなくゆっくりと瞬きをした。それだけのことだが、僕は妙にはっきりと覚えている。

僕の通う高校は海の近くにあって、徒歩通学の僕は海沿いの道路を通って帰る。最初は流木か何かだと思ったのだ。しかし、それが白っぽくてよく見ると人間だと気付いた。変に思って下まで降りると、少女が一人。なんと僕の高校の制服を着ていた。波打ち際にうつ伏せに倒れていたその少女はびしょびしょに濡れていていたが、けがはなさそうだった。僕はひと月ほど前に受けた保健の授業を必死に思い出す。人が倒れているのを見かけたら安全を確保し、それから軽く肩をたたきながら、

「だ、だいじょうぶですか！　もしもーし！」

肩をつかんで思いっきりゆさぶり、ここ最近で一番の大声を出した。頭を揺らすのは禁物だなんて考える余裕もない。もはや救命行動と呼べるかも怪しい。

幸い命に別条はなかったようで、ほどなくして少女は起き上がった。驚いたことにその子は僕の知り合いだったのだ。

「た、高岸さん」

顔は砂だらけで、僕のことをまだ焦点の合わない目で見てはいるが、間違いなく高岸海月である。知り合いと言ってもクラスが一緒なだけだ。

「さっきうるさくしてたの、君？」

ほぼ独り言のように海月が言う。すこし、いや、だいぶ機嫌が悪そうだ。

「あ、うん、ごめん。でも倒れてたから」

ふうん、と海月は不思議そうな顔をする。

「帰ってきただけなのに」

帰ってきた？

「どこから？」

「だから、海から」

「海の中ってこと？」

「信じてないでしょ」

「いや、べつに」

「信じてないでしょ」

「あ、はい、信じてません……」

これでもかというほど機嫌の悪い顔をするので目をそらしてしまった。でも言い訳させてほしい。ほぼ初めて話すクラ

スメイトに「私は海から帰ってきた」なんて言われて、信じられる人がいるだろうか。
「わかるでしょ、夏だから、里帰りだよ」
「はあ」
まだ七月も始まったばかりだから里帰りは早いんじゃないかな、と言いかけてやめた。というのも、急に海月がうっとりした顔になったからだ。
「すっごく楽しいんだよ、海は。冷たくて気持ちいいし、みんな私の帰りを喜んでくれるの」
みんな、とは魚か何かだろうか。このあたりでやっと思い出した。高岸海月がいわゆる「不思議ちゃん」であったことを。中庭の小さな池に顔を突っ込んでいるのを見たとか、水たまりに向かってぶつぶつ独り言を言っていたとか、海月に関する話と言えばそんなものばかりだった。こういう時にはなんて返せばいいんだろう、と考えを巡らせていると海月がすっと立ち上がった。
「もう行かないと」
その表情はいつの間にか沈んでいた。
「どこに？」
「陸の家」
たぶん自分の家のことだと勝手に納得して「そっか。じゃあまたね高岸さん」と手を振った。しかし、僕には見向きもせずにもう背を向けて歩き出していた。

水泳の授業、夏とはいえ午前中の水は冷たい。海月はどうしているのかと思って周りを見たが、海月はプールサイドのベンチに制服姿で座っていた。こんなに暑いのにわざわざ長袖の夏服を着て、プールの方にぼうっと目をやっていた。今まで注意したこともなかったが、海月の手足は棒きれのように細い。肌も青白くてなんとなく儚げな印象だ。「海に帰る」と言ったのをなんとなく信じてしまいそうな雰囲気が海月にはあった。いや、やっぱりありえないだろ、と僕はひとり首を振る。同級生が、海が故郷の妖精だなんて今どき小学生でも信じなさそうだ。もちろん僕だってその手の話は一応中学生で卒業している。しかし昨日の件で海月は僕の頭の中にずっと居座っていた。海月がどんな人物なのか気になって仕方なくなってしまったのだ。それで朝登校してからずっと話す機会を窺っていたのだが、ついにこの時間もタイミングを失い終業のチャイムを聞いた。
プールから教室までの帰り道、早めにイモ洗い状態の更衣室から抜け出せた僕は、目の前に海月を見つけた。
「ねえ」
と僕が声をかけると、海月はゆっくりこっちを向いた。それから喋り方を忘れたように僕をじっと見つめていたが、しばらくして「あ、昨日の人」とつぶやいた。どうやら忘れていたのは僕の存在だったらしい。あまり他人に、いわゆる『陸のもの』に興味がないんだろうか。
「そう、昨日の人。あれからどう、体調とか。体育も休んで

たけど」
「べつに。休んでるのはいつもだし」
そうだったか。周りに興味がないのも、人のことを言えなかった。
「わたしプール嫌いなの。朝のは特に水が死んでるから。かわいそう。嫌な臭い」
そう言うとちょっとだけ顔をしかめた。塩素のことだろうか。僕は結構好きなんだけど。そう言うと海月は信じられないという風な顔をした。意外と表情が豊かである。それからまじめな顔に戻って、
「早く帰りたいな。夏休みになればまた帰れるんだけど」
「海に？」
「海に。毎日暑くて、楽しくないもん」
「そっかあ」
機嫌を損ねるのも嫌だったので話に乗ってみる。なんというか、話しぶりが自然すぎて違和感を感じなくなってきた気がする。
後ろから話し声が聞こえてきた。どうやら着替えが終わった人たちが一気に出てきたようだ。と同時に、海月は歩くスピードを速めた。僕もそれについて行く。
「あのぅ、高岸さんって僕の名前知ってるの？」
「安野仁瀬。一年二組出席番号一番。それくらいは覚えてる」
「なんかごめん」
「なんで謝るの」
それと、と海月は急に止まって振り向いた。僕も急ブレーキをかける。ふたりの顔が近くなる。
「わたしとはあまり話さないほうがいいかもしれない」
「え、どうして」
「陸の子はみんなわたしのことが嫌い」
そう言ったきり、再び早歩きしだしてから教室に着くまで海月は一言も喋らなかった。

「高岸ぃ？　あの電波ちゃんか？」
目の前のあほ面がおにぎりを頬張ったまますっとんきょうな声を出す。
「ちょっと、唾飛んだんだけど」
「そんなことどーでもいい！　やっと仁瀬が高校デビューしたかと思ったらやばい奴しか友達いないのかよ」
「今、自分の首絞めたね」
ここは天文部の部室。目の前にいるのは僕の数少ない友達のひとりである山之口悠だ。僕の友達にしては顔が広くて社交性のあるやつだが、中学校のころからなぜかよく一緒にいる。高校ではクラスも離れたし疎遠になるかなと思っていたが、僕が天文部の体験入部にきたときにはこいつはすでに先輩たちの輪の中心にいた。
「高校デビューとかしてないし。昨日おぼれてるのを助けたんだから、そのあとが気になるのが普通じゃない？」
「たぶん俺は倒れてるの見ても助けないな。高岸だったらな

おさら」
「薄情者」
「違う違う！　あいつ良い噂ないからさ、あんまり関わりたくないんだよ」
「悪い人ではなかったと思うけどな」
「そうか？　なんか辻村が高岸がどうのこうの言ってた気がするけど」
「辻村さんと高岸さんだったら僕は高岸さんを信用する」
「誰と私が、って？」
　背後で声がして振り向くと目つきのきつい女子が一人。辻村美佳子である。見た目が華やかで、なんだか文化部にはいなそうな顔だが、天文部の現部長であり僕のクラスメイトだ。
「なんの話？」
「高岸の話。辻村がこの前なんか言ってただろ。なんか毛嫌いしてるし」
「私だって高岸さんのことが嫌いで言ってるわけじゃないの。証拠もあるんだから」
　ふん、と鼻を鳴らすこの少女に、僕の頭が上がるわけがなかった。
「あの子中学校の時に入水自殺しかけたんだって。それも別の女の子も一緒に。その時には二人とも助かったんだけど、その女の子、ショックで学校いけなくなっちゃったみたい」
「なんでそんなこと知ってるの？」
「私の友達が高岸さんと同じ中学だったの。昔からああみたいだから、もう直しようがないんだよ。関わらないほうが身のため」
　まあ、と辻村はわざとらしくため息をついた。
「別に安野がどうなっても、最悪部員が減るくらいの被害しかないけどね」
「辻村ひっでえ！　あ、その時は高岸に入ってもらえば？」
「やだ、それなら廃部のほうがマシ！」
「ひどいのはどっちだよ」
　どうしてよく知らない人をそこまで否定できるのだろう、なんて思いながら、海月の入水自殺未遂について考えていた。もしかすると僕が海月と会ったあの時も？　彼女の「帰りたい」は「死にたい」なのだろうか。なんとなく彼女の海の住人発言を信じていたが、当然彼女は人間なわけで、えら呼吸もできない。全部作り話か妄想だと思ったほうがいいのは分かるが、なんとなくそんな気分にはなれなかった。それは噂だけで海月を嫌う『陸の子』たちと一緒になってしまうからだ。信じてみて、天文部の部員が減ってしまったらそれはそれでいいと思う。
　何より、僕はこの手の奇妙な話をやっぱり卒業できていなかった。
　そういうわけで、僕は海月に再度接近を試みた。でも女子と話すのは慣れていないし、「話しかけないほうがいい」と言われてしまった手前、気軽に話しかけには行けなかった。僕が今日の午後でできたのは人目を忍んで海月の観察をするく

らいだった。気持ち悪い自覚はある。
　海月は僕の席の隣の列の二つ前で、ちらっと視界に入れるにはちょうど良かった。授業中はいたって普通で、居眠りもしなければ騒いだりもしない。休み時間はただうつむきがちに席に座ったまま離れない。結局、観察の収穫はそれくらいだった。前の席の女子を盗み見ているという状況が何とも後ろめたくて、もしかしたら挙動不審だったかもしれない。誰も僕のことなんて見ていないと分かっていてもだ。一人でぼんやり座っていると、いろいろな声が同じボリュームで入ってくる。笑い声、叫び声のような話し声。僕も海月もそれらからぼんやりと隔絶されている。話しかけてくるのも辻村が部活の用事がある時だけだし、その時の辻村は部室のときの三倍くらい嫌そうな態度を見せてくる。僕らは似た者同士というわけだ。
　授業がすべて終わり、放課後になった。今日は部活がないのでさっさと帰るに限る。ふと、海月の席のほうを見るともういなくなっていた。僕も荷物をまとめて教室を出る。廊下で友達を待っている人や、はやくも部活のユニフォームに着替えてたむろしている奴らを押しのけて靴箱を目指す。もしかしたら海月はまだその辺にいるかもしれないと少し期待しつつ、スリッパを脱いでスニーカーを履き、昇降口を出る。途端に熱気と日差しが飛んできて「うわっ」と声を漏らした。しかし学校を出ても海月の姿は見当たらなかった。

　次の日は打って変わって大雨だった。台風が近づいているそうで、電車が止まったら通勤どうしよう、父さんがぼやいていた。いつもは家と学校が近いのは便利だが、こんな天気の日は少し恨めしい。いつもの通学路を早歩きする。風も強くなってきて、海もいつもより荒れていた。傘はいちおう差していたが、横から雨が入ってくるのであまり役に立っているとは言えなかった。ここまでして登校する僕を誰かほめてほしい。本当に。
　いつもより十分ほど遅く学校に着いた。レインコートを着て校門に立っている教師に会釈をして、一秒でも早く屋根の下に入るべく早歩きをする。時間ぎりぎりで教室に入ると、クラスの半分くらいの人しか集まっていなかった。いつもならもっと人がいるのだが、この天気だからバスや電車も遅れているのかも知れない。濡れた体に冷房は寒すぎて、思わず両腕をさすった。
　ふと斜め前を見ると、海月が座っている。昨日と同じようにすこし下を向いて黙っていた。彼女にとっては今日の天気はどうなんだろうか。なんとなく晴れより雨のほうが好きそうな気がする。人もあまりいないし、と話しかけようとしたら、ドアが派手な音をたてて開いて、担任が入ってきた。
「台風が近づいているみたいだ。遅刻してきた奴には遅刻届を持って来いと言っておいてくれ」
「れーい、ありがとうございましたー」
と気の抜けた挨拶をして、おのおの準備を始める。雨はさ

つきより激しくなっていた。

午前中で全員下校だって、とクラスの誰かが速報を持ってくると、教室が沸いた。二時間目が終わった後のことだった。その後の授業にきた教師によると、台風が今日の夕方直撃するらしい。今も雨風がひどいからできるだけ親に迎えにきてもらうように、とのことだった。きた時よりも荒れているであろう天気を思うと気が沈んだが、早く帰れるからよしとした。その後ずっと浮ついた教室で、海月だけがずっと朝から変わらないように思えた。

四時間目の後、終礼があって解散になると途端に騒がしくなる。電話を掛ける人、食べてから帰るのか弁当を広げる人、カラオケ行こうよ、という会話まで。僕はどうしようかな、と思ったが、とりあえず家に電話を掛けることにした。

廊下に出てから家に電話を掛けると、三コールほどで寝ぼけた声が答えた。

「はぁい、安野ですがぁ」

「もしかして寝てたの？」

「なんだ、仁瀬？　どうしたの」

「台風で学校なしだって。今から帰る」

「へえ、よかったじゃん？　まああたしも休講なんだけどねー」

迎えに行った方がいいかと聞かれて、いやいいよ、と答えた。免許をこの間取ったばかりの姉は残念そうに、気を付けてねと電話を切った。ふと窓を見ると、バケツをひっくり返したような大雨だった。やっぱり迎えにきてもらった方がよかったかな、なんて考えてながら教室に戻るともう大体の人は帰ってしまったようだった。しかし、僕の席の近くに何人かたむろしている。

僕の席に座っている茶髪と腕組みしているポニーテールとその横に立っているびしょぬれの三つ編み。

「おー、遅いぞ仁瀬」

山之口が僕に手を振る。

「はいこれ」

辻村が僕にプリントの束を渡してきた。一番上のプリントに印刷されているタイトルは「合宿のお知らせ」。

「合宿？　いつ？」

「今週末」

「ええっ」

そういえば少し前にそんなことを言っていた気がする。すっかり忘れていたけれどその時は僕もなんだかテンションが上がって盛り上がった記憶がある。まさか泊まりがけだとは思わなかった。

「今日の昼休みに渡そうと思ってたんだけど学校なくなっちゃったし。早い方がいいと思って」

それで僕を待っていたのか。

「先生に許可とったの？」

「当たり前でしょ。でも、当日は先生こないよ。この日忙し

いから〜って言ってたけど」
「めんどくさいだけだろうね」
天文部の顧問は数学の非常勤の先生なのだが、顧問といっても名ばかりで、部活に顔を出すこともほとんどない。ほぼいないようなものだった。
「……で、なんで高岸さんもいるの？　びしょぬれだし」
「やっと聞いてくれたか」
待ってましたとばかりに山之口が口を開き、さっきから固まったままの海月を指さす。
「合宿には高岸も参加する」
「は？」
海月を見ると、手にはプリントを握っている。なんとなく縮こまっているように見えるのは気のせいか。
「最初は誘うつもり無かったのよ。でもこいつがいきなり高岸さん捕まえて一緒に行こうって言い出すから……」
「いや、こんな雨の日に外に出て行くのを見ちゃったもんだから声をかけずにはいられなかった」
「意味わかんないでしょ？　でも高岸さんも行くって感じになってて……」
そう言って大きなため息をついた辻村の表情は苦々しげだった。不満だが、本人の前では口に出せないといったところだろう。
「人聞き悪いな〜。女子がいたほうが辻村も楽しいじゃん」
「高岸さん嫌がってたでしょ！」
と口喧嘩に発展している。うつむいたままの海月に、
「あの、僕はいいと思うけど嫌だったら断っていいからね。あいつ人の話聞かないから」
と言うと、海月は首を横に振った。
「大丈夫」
声は小さいが、少し力がこもっているように聞こえた。手元のプリントの束をぱらぱらとめくってみると、一枚だけカラー印刷された紙があった。観測場所の周辺の写真だろうか。海岸から撮った写真で、青い海と砂浜が写っている。
「泊まる旅館からは海が見えるんだってよ」
そう言って山之口はにやりと笑ってみせた。
その後待ち合わせや合宿のスケジュールなんかを確認して解散した。山之口は電車の時間があるとかでさっさと教室を出て、海月も無言で会釈をして帰ってしまった。教室には僕と辻村が残された。
「辻村さん、高岸さんと一緒って大丈夫なの？」
「まあ、思ってたより普通の子だったけど……やっぱりよく分かんない」
でも、と辻村は続ける。
「あの子、全然喋らないんだね。さっきもずっと山之口がぺりっぱなしだったの」
「確かに。でも普通に会話はするよ」
「そうなんだ」
初めて話したときはむしろ意外と口数が多いんだなと思っ

たくらいだったが。二対一で気圧されたのだろうか。
「もうすぐ終業式だから当日までは四人では集まれないかも。部活もそんなにすることないしね。あ、あと合宿の日に部室の望遠鏡とかカメラとか持ってきてね。山之口と二人で」
「ええー」
「何か文句ある？」
「ないです」
「よろしく。じゃ、私も帰るね。お疲れ」
「お疲れー」
とうとう教室には僕一人になった。そういえば海月が僕以外の人と話しているのは初めて見た気がする。最近喋るようになって忘れていたがあの子は普段は全く言葉を発さない。どうして海で会ったとき「海に帰っていた」なんてことまで僕に話したんだろう、と考えたところでまた「みんなわたしのことが嫌い」と言った海月と入水未遂の話を思い出した。やっぱり底知れない人だが、深入りしていいのだろうか。またプリントに目を落とすと、コピー用紙に印刷された青い海が目にまぶしかった。
次の日からは大雨が嘘のように快晴と猛暑が続いた。ぼんやりと過ごしている間に終業式が終わっていて、気づけばもう合宿前日だった。
午前九時、アラームの音で目を覚ました僕は、枕元の眼鏡をかけて、普段着に着替えてから一階に降りた。両親とも仕事に行っているようで、リビングには誰もいなかった。テーブルの上に昼食のカレーが僕と姉の二人分。姉はまだ寝ているのか、それとも大学だろうか。
ぼうっとした頭のままテレビをつけると、ちょうどワイドショーで流星群の話をしていた。「楽しみです」と街頭インタビューに答えている小学生も、専門家の解説映像に相槌を打つアナウンサーも、もしかしたら流星群なんて毛ほども興味ないかもしれない。小さいころから星を見るのは好きだったが今まで周りにそういう人はいなかった。いつか宇宙に行ってみたいとも、中学生になるころには他人には言わないようになっていた。いくら手を伸ばしても届かない夜空は僕を憧れさせ、たまに懐かしい気持ちにもさせた。僕は宇宙人なんじゃないかとアホみたいなことを一晩中考えたこともある。だから初めあの子が海の話をしたとき、驚きはしたけれどまあそんな風に思う人もいるんだな、なんてあっさり飲み込んだ自分がいた。彼女にとっての海と僕の空は同じなんだろうか。今日は話せるだろうか。テレビを消して、立ち上がる。テーブルに置いていたスマホを見ると、山之口からメッセージがきていた。
『起きたか？　部室に十二時半に集合な！』
リュックサックに荷物を適当に詰めて、カレーをかきこんでから家を出た。玄関のドアを開けた瞬間、久しぶりの外の熱気と太陽のまぶしさが飛び込んできた。通学路は半分以上海沿いの道路なので日陰を作るものが何もない。学校に着くころには汗だくになっていた。

部室のドアを開けると、もう山之口がいた。
「お、やっときた。死にそうな顔してるぞ、大丈夫か？」
「暑い」
「夏だからなあ、てかだいぶ参ってるな」
と笑う山之口はなんだかファッション雑誌から抜け出したような格好をしていた。一言でいうとチャラい。しかし似合っているのが癪に障る。
「山之口の私服って初めて見た」
「そうだっけ？　まあお前は予想通りダサいな。棚からカメラと三脚取ってくれるか？」
ダサいと言われたことに若干へこみつつ、ガラス戸付きの棚をあさる。カメラケースらしきカバンと三脚を無事見つけて腕に抱えた。
「なあ仁瀬」
よっ、と望遠鏡を担ぎながら山之口が口を開く。
「ん？」
「お前さ、やっぱり高岸のこと好きだろ」
ガシャンと音がした。自分の足元を見るとさっきまで持っていたカメラの三脚が転がっていた。それを見て山之口は「分かりやすっ」と笑った。
「いや、そんなんじゃないよ。ただ心配っていうか、ほら、あの人何するか分かんないし」
「それで目で追ってるうちに、ってよくある話だよな」
「だから違うってば……」
「まあ、俺に感謝しろよ。高岸を口説いたの俺なんだから」
「言い方に語弊がありすぎる」
ケタケタと笑いながら机に置いてあったカバンを肩にかけて部室を出ようとする背中に、仕返しのつもりで声をかける。
「山之口はさ、いないの？　そういう人」
「えー、絶対教えてやんねえ」
そいつは振り向きもせずに片手だけこちらにひらひらと振って、
「置いてくぞー」
とおどけた。何だよ、と独りごちてから僕もそれについて行った。
それからどうでもいいような話をしながら歩いて、待ち合わせ場所にしていた駅の入り口にはもう辻村と高岸さんがいた。微妙な距離を保って横に並んでいるふたりはなんだかアンバランスだった。特に会話もしないで、ジーンズに高いポニーテールの辻村はスマホを眺め、高岸さんは白いワンピースの裾を握って自分の足元を見ている。辻村が僕らに気づくなり、
「遅いんだけど」
と口をとがらせた。ちなみに今は待ち合わせの五分前だ。
「ほんっとに暑い。早く中入ろ」
駅構内に入って階段を上るとすぐに改札がある。券売機で切符を買った。辻村と山之口はＩＣカードがあるらしい。ふと横を見ると、海月が隣の券売機の前で固まっていた。

「買い方分からないの？」
小声で声をかけると海月はぴくっとはねて無言でうなずいた。自分の切符を財布にしまって隣の券売機に移動する。
「ここの切符って書いてあるところ押して……うん、そしたら人数は一人。路線はこっち」
海月がぎこちない手つきでタッチパネルを操作して行く。ほどなくして取り出し口から出てきた切符を手に取ると、裏返したり、少し曲げたりし始めた。心なしか目が輝いているように見える。ひょっとして電車も切符も初めてなのだろうか。
「行こうか」
と言うと海月は僕の方を向いて、
「ありがとう」
とはにかんだ。予想外の表情をくらってしまった僕はとっさにうつむいてしまい
「あ、改札こっち、だよ」
とそのまま歩き出した。「分かりやすっ」と記憶の中の山之口が笑った。
改札を出て少し歩いたところで山之口と辻村が待っていた。
「電車、あと十分で来るって」
時刻表を見ながら辻村が言う。僕たちの目的地はここから電車で三時間、歩いて二十分の古い旅館だ。田舎だからよく星が見えて、近くに海岸もあるので辻村曰く穴場らしい。僕たちはそこに一泊して天体観測をする。

ホームにきた電車に乗り込んで席を探す。ふたり席が向かい合っている形の座席で、僕は山之口の隣の窓際、向かいは海月だ。最初の一時間くらいは辻村が開けたお菓子をみんなでつまんだり山之口が適当な世間話を振ったりしていたが、それにももう飽きてきて、辻村なんかは課題らしきものを始めた。駅を過ぎるたびに人は減って行き、車内は静かでけだるい雰囲気に包まれていた。目の前の海月は窓の外をじっと眺めている。窓から入ってくる光が、海月の白い肌を浮かび上がらせているように見えた。彼女の瞳を、景色がどんどん通り過ぎて行く。
いつの間にか寝てしまっていたようで、肩を揺すられる感触で目が覚めた。
「ほら、着いたぞ。いつまで寝てんだ」
寝ぼけた頭で網棚から荷物を取って電車を降りると、そこは無人駅だった。かすかに潮のにおいがする。切符を回収箱に入れて駅を出ると、少し遠くに海が見えた。風があるからか、昼間だがあまり暑くない。からっと晴れた空の下を、僕たちは歩いた。
ずいぶん歩いて足が疲れてきたころ、古ぼけた建物にたどり着いた。辻村が受付を済ませて鍵を僕に渡した。男子と女子に分かれて一部屋ずつだ。部屋に荷物をおいたら、夜まで自由行動とのお達しがあってひとまず解散となった。
「夜十時にまたここに集合ね。望遠鏡とカメラ持ってきて。遅れないでね」

そう言うと辻村は海月を連れて部屋のほうに行った。俺たちも行くか、と歩き出した山之口にあわててついて行く。
部屋は外装のイメージ通り年季の入った和室だった。ポットと湯のみが乗っているちゃぶ台と座布団。部屋にあるのはそれだけだ。
「夜ご飯ってどうするんだっけ」
「出ないから各自だってよ。なんか買いに行くか？」
「んー、まだいいや」
ごろんと畳に寝転がるとどっとだるさが襲ってきた。
「今何時？」
「五時半」
「八時に、起こして」
「おまえ、ホントよく寝るのな」
と、言うが早いか、平手打ちが飛んできた。
「いった！？」
「そうはいかないぞ！　お前に寝られたら暇だからな。トランプと花札とウノ、どれがいい？」
「嫌だ眠い」
「そんなこと言うなよー、頼む！　電車の中は我慢してやったんだから」
こいつそんなにゲーム好きだったか、と一瞬思ったが、ただ単に僕に嫌がらせがしたいだけだと思う。まったく迷惑な奴だ。
「……神経衰弱なら付き合う」
それに折れてしまう僕も僕だが。
結局、神経衰弱を始め、ババ抜き、ポーカーなど思いつく限りのトランプゲームをしたが全部負けた。途中からは僕がむきになって何度も再戦を頼んでいて、さすがの山之口もうんざりしていた。
「おまえどうやったらそんなに負けられるんだよ、才能あるって」
「全然嬉しくない」
「そりゃほめてないからな。次はウノでもするか？」
「いや、しばらくいいや……今何時？」
テレビをつけた山之口が七時か、と言ったのと同時に部屋の扉がノックされた。僕が開けに行くと、辻村が立っていた。
「あれっ、どうしたの」
「高岸さんがいないの」
「えっ？」
「私が先にお風呂に入ってる間にいなくなったの。そっちにきてないかと思って」
「きてないよね？」
「うん」
辻村の顔に不安の色が浮かんだ。
「電話とかは？」
「連絡先は知ってるけど、携帯置きっぱなしで。いなくなったのは三十分くらい前なんだけど、戻ってこないから心配な

の」
　もし戻ってこなかったら。最悪の状況を脳が何パターンも作っては僕に見せつけてくる。
「あの、僕探しに行ってくる」
「ちょ、仁瀬、やめとけって」
「一時間帰ってこなかったら連絡して」
　返事を聞かずに旅館を後にした。
　外は日が沈んだばかりのようだが、街灯がぽつぽつと点いているだけで薄暗い。海月が行きそうなところ、といえば一つしかない。海だ。
　このあたりから海に降りる道は一つしかないと旅館への道のりで辻村が説明していた。昼きた道を少し戻ると道の横に小さな階段があった。階段を下りてさくさくと砂浜を歩くと、波打ち際に人影を見つけた。たまらず僕は走り出す。人影が近づいてきて、見知ったシルエットを象る。顔がはっきり見えるくらいの距離になったところで海月が僕の方を振り返った。その後ろに見えたものに目を見開き、僕は叫んでいた。
「高岸さん」
　伸ばした手の先に、海月の後ろに大波が迫っている。指先が海月の肩に触れて、目が合ったと同時に波が覆いかぶさってきた。頭から水を被って、体ごと引っ張られるようだった。と、その中で何かが僕の手に当たった。細くて小さいそれは手首をつかんで、波より強い力で僕を引き寄せた。あまりに急で呼吸もできず、目も開けられない。死んでしまうのだろうか、と頭の中の自分が口にする。僕と海月と二人で。悪くないかもしれないなんて思っている場合ではない。冷たい水の中にがんじがらめにされて、ついに止めていた息も吐き出してしまった瞬間、ふいに呼吸が楽になった。ぎゅっと閉じていた目を開けると、青色が目に飛び込んできた。光がどこからが差し込んでいて、驚くほど静かな空間だった。僕の手首を握っていた海月と目が合った。ふっと笑った海月を見て、ここが海なんだと急に分かった。
「びっくりした？」
　と聞かれて、黙ってうなずく。
「よかった、ちゃんと一緒にこられて。……痛くない？」
「だ、大丈夫。それよりここって」
「海だけど、さっきまでいた海じゃないところ。私のおうち」
　海月は僕の手を離してその場でくるりと回った。素足が水を蹴って体が浮き上がり、髪の毛とワンピースが一緒に舞う。
「あのまま波に飲み込まれてたら、きっと溺れてたから。〈こっち〉に入ってこられない人もいるみたいなんだけど仁瀬は大丈夫だったみたい」
　そこでやっと僕は彼女を探しにきていたことを思い出した。
「そ、そうだ。高岸さん、辻村に何も言わないで出て行ったでしょ。すごく心配してたよ。僕も心配したし」
　心配されていたのが意外だったのだろうか、少し驚いたような表情を見せた。
「ごめんなさい。……海が、呼んでたから」

いつか聞いたようなセリフだ。
「海が？」
「たまにあるの。『帰っておいで』って。その時はここにこられる。今も『おかえりなさい』って言ってる」
目を閉じて耳をすませてみる。何も聞こえないと思っていたが、次第に何かが話す声が聞こえてきた。低いような高いようなささやき声。一つだけではない。それはどんどん増えて行き、賑やかになる。いや、賑やかだったことにやっと僕が気づいたのかもしれない。ぱっと目を開けると、さっきまでとは全く違う光景が広がっていた。
深い海の青色に色とりどりの光が浮かぶ。その一つ一つは魚の形に姿を変えたり、見たことの無い形になったりしながら僕と海月の周りを漂っていた。光のひとつが海月の頬を撫でるように通り過ぎると、海月はくすくすと笑う。
「……宇宙みたいだ」
気づいたらつぶやいていた。
「宇宙？」
「うん、宇宙の真ん中にいるみたい」
海月はそう、とうなずいて、
「仁瀬は宇宙が好き」
と確認するように口の中で言った。
「時々、星を見ると懐かしくなるんだ。理由は分からないけど」
「じゃあ仁瀬は空からきたんだ」
「そうかな」
「そうだよ。……わたしも見てみたい、仁瀬がいた空。きっときれい」
海月が上に向かって手を伸ばす。差し込む光を白い手がすり抜けて行った。それがあまりにきれいで、少し怖かった。
「じゃあ、行こうか」
「どこに」
「流星群見よう。きれいだよ」
「分かった」
海月が僕の手を取る。
「……分からないけど、もう帰ってこない気がする」
「なんで？」
答えを聞く前に体が何かに押し上げられる。さっき僕たちをここに連れて来た波のような力は、うねって光のざわめきがより激しくなる中、海月がつぶやくのが聞こえた。
「もう大丈夫だから」
その次に聞こえたのは波の音だった。どうやら戻ってきたようだ。仰向けに倒れたまま目を開けると、満天の星空が広がる。
「……わあ」
撒いたように散らばった星々は写真で見るよりずっと美しかった。水平線の少し上で満月が浮かんでいて海を照らしている。海と夜空の境目は混ざりあって、足元の波も星のように細かく光った。

「そうだ、時間」
と、起き上がってポケットに入れていたスマホを出そうとすると、服の湿った感触がした。嫌な予感がしながらスマホの電源ボタンを押しても何も起こらない。完全にお陀仏である。振っても叩いても反応がないスマホに落胆していると、海月が横から覗き込んできた。
「どうしたの」
「スマホ水没しちゃって」
「そう」
特に感想はないらしい。隣に座って砂のついた髪の毛を梳いている海月を見ながら、僕は海月と最初に海で会った時のことを思い出す。海の妖精は「もう帰って来なくて大丈夫」と言った。空が見たいと、そう言った。
「流れ星まだかな」
前を向きながらぽつりと海月が呟く。
「どうだろう。あ、二人が待ってるから帰らないといけないんだ」
かなり時間も経ったようだし、心配しているだろう。立ち上がって体に付いた砂を払う。海水でべとついた肌を生ぬるい風が撫でた。横でまだ三角座りをしている海月に、
「高岸さん」
すっと手が自然に出る。
「帰ろうか」
僕の手のひらに伸ばされた手は少し冷たかった。